カゴムシ

日田郡上津江村川原小学校
中間照雄

日田郡津江山郷の各部落では、毎年十二月から次年の二月の頃にかけての冬閑期に、カゴムシといわれる仕事が行なわれている。

カゴムシとは、カゴをむすという意味である。カゴというのは紙（日本紙）の原料になるコウゾの木（楮）のことで、この地方の方言であり、むす（蒸）というのは、このカゴの木をむして皮とカゴガラとに分離させ、日本紙の原料を生産する仕事のことである。また皮をはいだ残りのものをカゴガラといい、かまどやふろばの焚き物にするので、その方面の仕事も兼ねているわけである。

ここでカゴムシの方法を記してみると、

一、山から運んできたカゴの木を小束にきびり（縛ること）、この小束を約二十束ほど合せて大束を作りあげる。

二、外にすえられた大きなクドに、大きなカマをのせ湯をわかす。その上にカゴの大束をのせ、大きなタルをその上にすっぽりかぶせる。（写真参照）

三、このようにして、一束を二時間以上むすのである。その間ぢゆう、樋から水をそそぎ湯の調整をはかる。

四、むし上つたらとり出し、元の小束にし、冷えないうちに皮とカゴガラとにむき分ける。（大体一人が一束か二束）

以上がカゴムシの過程である。

この方法からでも分るとおり、大束の扱い・冷えないうちに皮をむくなど、個人ではこの仕事は容易ではない。すなわち、多くの人数を要するのである。

したがつて、このカゴムシは部落内の何軒かの共同作業という形式がとられている。この地方では大体四軒ないし五軒が共同で一つのカマをもち、カゴムシを行なつている。作業は共同でも、生産物は個々の家の所有である。ただおもしろいことは、むいたあとのカゴガラはその人のものとなり、持つて帰つて焚き物にすることが出来るのである。この共同作業は家族総動員で行なう（とくに皮をはぐ時にそうである）。クドの周囲は人々の集まりの場となり、また話しの場となるのである。（写真参照）

日本紙の原料となる皮は、筑後方面の製紙業者に売り渡されているが、近年は原料の需要も減少し、この地方のカゴムシを行なう家も減少していつている。田畑の少ないこの地方では、茶・シイタケとならんで現金収入の重要な位置をしめていたが、現在ではこの山奥にも近代産業の波がおしよせ、この素朴なカゴムシの仕事も、津江山郷の斜陽生産の一つとなつている現状である。

〔写真説明〕

- 右に見える大きなタルの中にカゴが入つてむされている。
- タルの右下にあるのがカゴの木を束にしたもの（白いものでくびつてあるのが小束、黒いものでくびつてあるのが大束）
- 中央の少し左にさがつているつなは、タルを持ち上げるときに使うもので、大人がぶら下つてもちあげる。
- 左に横にのびているのが樋

（昭和三十七年一月末写す）